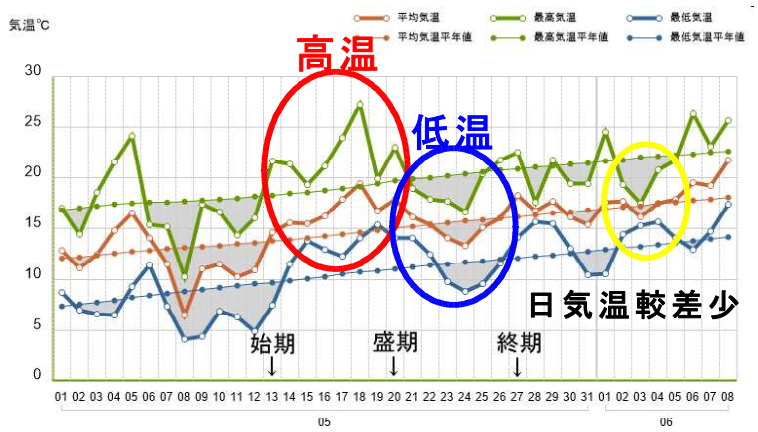
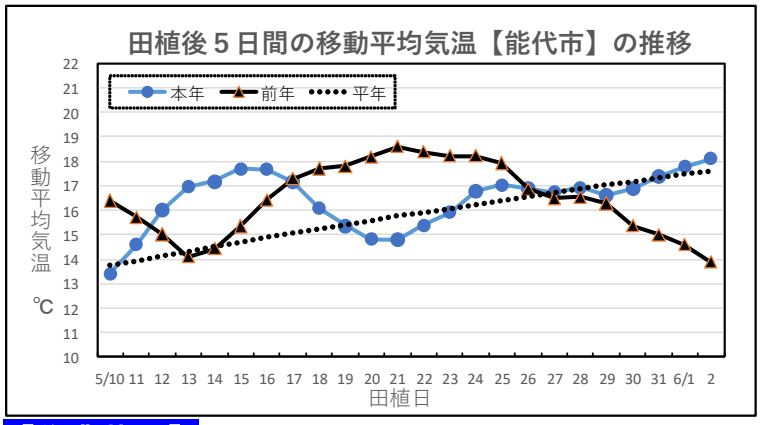
あぜ道
稲作技術情報
Ｎｏ．３５７（令和５年 No. ４）
令和５年６月１２日
▼発　行▼
山本地域振興局農林部農業振興普及課

田植え後の低温で茎数不足

～ 浅 水 管 理 で 分 げ つ の 確 保 を ！ ～

１　気象経過と作業状況





【気象経過】

５月14日から20日にかけて平年より気温が高く推移しましたが、５月20日を境に低温傾向となり、風の強い日も多くみられました。23日から26日には強い低温となりましたが、６月６日からは、気温は回復傾向にあります。また、６月に入ってからの日気温較差は小さく推移しました。

【５日間移動平均気温】

田植後５日間の移動平均気温は、５月20日以降の低温傾向により19日から22日にかけて低くなっています。そのため、この時期に田植えをしたほ場では、苗の活着が遅れたものと推察されます。

【作業状況】

田植作業の始期が５月13日（平年並）、盛期が５月20日（平年より１日早い）、終期が５月27日（平年並）でした。降雨が少なかったため、作業は順調に進みました。

２　生育状況

６月９日現在の管内水稲定点調査ほ（あきたこまち９地点）の生育は、草丈が平年並に推移しており、茎数は平年より少なく、葉数が平年比-0.2葉とやや少なくなっています。

５月21日から26日にかけての低温と強風、６月に入ってからの日気温較差が小さくなった影響により、分げつの発生が抑制されたため、茎数が少なくなっているとみられます。

○定点調査結果（６月９日）

	草丈(cm)	茎数(本/㎡)	葉数(葉)
本年	**26.4**	**127**	**6.1**
平年	26.4	150	6.3
前年	26.0	114	6.2
平年比	**100%**	**85%**	**-0.2葉**
前年比	102%	111%	-0.1葉

※平年は過去10カ年の平均値

３　分げつの発生を促進する水管理と適期の中干し

本年は、茎数が少ないほ場が多くみられます。目標収量の確保のため、分げつ発生を促す水管理を行い、早期の茎数確保に努めるようにしてください。

【分げつの発生を促進する水管理】

○分げつの発生は昼夜の水温較差が大きい場合に促進されます。そのため、**浅水管理を行い水温と地温を高めて日較差を大きく**します。ただし、田面が露出しないように注意してください。

○かん水は水温の低い早朝に短時間で行い、日中は止水管理を行ってください。

【適期の中干し】

○中干しは、無効分げつの発生を抑えるとともに、根の活力を高めて１穂粒数と千粒重を増加させる効果があります。下図を参考に、生育状況を見ながら中干しを開始してください。

○目標茎数である450本/㎡（下図参照）が確保できたら、中干しを開始するようにしてください。

○落水やその後の入水をスムーズに行うため、溝きりを実施しましょう。

＜図：茎数と中干し時期・程度の目安＞

目標茎数	中干し開始時期	中干し・溝切り	中干し後の管理
450本/㎡程度 ○21.2株/㎡ （坪70株）の場合 →平均茎数21本/株 ○18.2株/㎡ （坪60株）の場合 →平均茎数25本/株	○450本/㎡以上 →直ちに中干し ○450本/㎡下回る →浅水管理や間断かん水で茎数確保	○中干し期間 （７～10日程度） ○軽く亀裂が入り、足跡がつく程度 ○溝切りの実施	溝切りを活用した間断かん水の実施

４　いもち病防除（オリゼメート粒剤の散布）

初期の発病を抑えることは、その後の葉いもちの発生や穂いもちの伝染源を減少させます。葉いもち防除として箱施用剤や側条施用剤を使用していない場合は、６月15日頃（６月12～18日）にオリゼメート粒剤を10ａ当たり２kg散布します。湛水状態で散布し、散布後４～５日間は入水せず、７日間は落水や掛け流しをしないでください。

補植用余り苗は、いもち病が発生しやすく周辺ほ場への強力な伝染源となります。
ほ場に放置されている苗が散見されますので直ちに泥に埋めて処分してください。

５　斑点米カメムシ類対策

○本県の主要加害種であるアカスジカスミカメは、イネ科雑草、ホタルイ類等の穂に産卵するため、これらの雑草が畦畔や水田内で繁茂すると多発し、斑点米による被害が大きくなります。

○本年は雑草の発生が早く、一部では残草しているほ場も見られます。初中期一発型除草剤で雑草を抑えきれなかったほ場は、発生草種やほ場の湛水状況に応じた中・後期剤の散布を行ってください。

○斑点米カメムシ類の生息地を減らすために、農道や畦畔、休耕田、雑草地などの草刈りを出穂10～15日前までに数回実施します。

不明な点がある場合は、山本地域振興局農林部農業振興普及課（℡52-1241）までご連絡ください。